

(番外編) 図書館の色紙について

本高図書館には、次の15名の著名作家の筆による色紙が飾られております。

- | | | |
|-----------|--------------|-----------|
| ① 北 杜 夫 | ② 武者小路 実篤 | ③ 新 田 次 郎 |
| ④ 佐 藤 鉄 章 | ⑤ 石 原 慎太郎(?) | ⑥ 深 沢 七 郎 |
| ⑦ 北 條 誠 | ⑧ 石 坂 洋次郎 | ⑨ 今 東 光 |
| ⑩ 石 川 達 三 | ⑪ 山 崎 豊 子 | ⑫ 石 森 延 男 |
| ⑬ 伊 藤 桂 一 | ⑭ 源 氏 鶏 太 | ⑮ 山 手 樹一郎 |

現在の高校生には馴染みがない名前もあるかと思いますが、1960年代の日本を代表する作家の皆さんであり、いずれの色紙も本荘高校生に向けて書かれたものです。これらの色紙が本校に送られてくるに至った経緯について、本荘高校図書館報「明窓浄机」第64号(2016年3月1日号)に当時の小園敦教頭先生(現:秋田県立博物館長)が「半世紀前の贈り物～図書館で感じる『無限の慨』」と題して寄稿されていますので、その文章の一部を紹介させていただきます。

(前略)私がこの額の内容を知ったのは、33年ぶりに母校に帰った平成25年4月、図書館に入った瞬間だった。力強く、あるいはしなやかに語りかけてくる先人の言葉を、学級担任としてクラスの生徒たちに伝えた。なかには誰の作品かわからないものもあったが、学級通信で紹介した。武者小路実篤は「誠実」、新田次郎は「読むことは築くこと 考えることは創ること」、今東光の「百雑碎」など、15人の作家がそれぞれの思い、好きな言葉を書いている。これら15人の心を映し出した色紙が、なぜ図書館に飾られているのか。その理由は、16番目の額を見るとある程度推測できる。そこには1965(昭和40)年9月4日付けで、当時の3年生、図書委員会の代表であった橋本孝雄(第61期)さんの名前で次のような依頼文が残っている。(一部改変、抜粋)

謹啓

残暑厳しい此の頃先生には益々御繁忙の事と遠察申し上げます。

誠に突然で不躰けなお願いですのでお叱りを受ると思いますが当校秋の学校祭で私ども図書館運営委員は著名作家諸先生の写真と直筆の署名を飾らして頂き作家諸先生を紹介すると共に読書意欲の向上を図ろうと企画しました。現在の構想では、先ず先生のお写真を著書広告などから入手しこれを複製し四ツ切りに拡大します。その写真を飾った下に同封の色紙に先生の直筆の署名を(何かその他に一筆書いて頂ければ光栄です)お書き頂きそれを展示させて頂きます。その他私どもの手で先生の御略歴や著作名などを紹介させて頂くというものです。つまり現代の著名作家を写真で身近かに印象づけ更

に直筆でその関心効果を倍加させようという試みでございます。勝手なお願いですがどうぞ我々の企画を成功させるために先生のお写真を飾ることをお許しください。又お手数でも同封の色紙に御署名をお書きそえくださるようお願いいたします。

本校創立六十五年 生徒数男女合計1,400名県下でも古く且つ大きな学校で今回の企ても大いに裨益する処が大であろうと信じています。諸先生の御繁忙は我々の想像以上だと拝察しているのでありますから是非その成功の為に特別の御協力をくださる様お願い申上げる次第でございます。

末尾乍ら先生の御健勝をお祈り申し上げます。

尚 御面倒でも九月十八日迄お願い申し上げます。

敬具

橋本さんによれば、当時の図書委員会のメンバーが相談して、著名作家に協力を依頼し学校祭を盛り上げようと考えたそうである。担当の先生が指導したというよりは、生徒同士で話し合い実行に移した。綿密な計画というより、軽い気持ちと勢いで作家を選定し色紙を送付したとのこと。日付けから推察すると、著名作家に2週間で書いてくださいとお願いしたことになり、無謀とも思える企画である。

ところが、現存している15枚の色紙を見ると、色紙に言葉を添えてくださった作家は、秋田県の高校生の熱心な要請に対して、当時の本荘高校生のために心を込めて書いてくれたのである。どの言葉からも、作家活動の原点やスタンスが想像でき、1965年当時の日本社会に直接あるいは間接的に一石を投じる言葉と理解している。また、体験に裏打ちされた、人生をよりよく生きるための示唆に富む言葉である。

50年が経過した今、色紙額を見上げると、各作家の本荘高校生に期待する思いを、言葉の力や筆の力からひしひしと感じずにはいられない。(中略) あらためて、図書委員会の無謀なお願いに心意気で答えてくれた15人の先人に感謝するとともに、本荘高校の無謀な、しかし行動力のある先輩方に「若き血たぎる益荒男の無限の概」と大きな感動を覚えるとともに心から敬意を表したい。先輩方の行動が50年経過した今を生きる本高生に、貴重な文化財を提供してくれたのである。同時に、在校生には先輩方の「無限の概」を継承してほしいと願っている。(中略) 本高生諸君は、半世紀前の先輩たちの「無謀」な計画が現在の本荘高校の「知の財産」を形成していることを理解し、諸君も先輩を手本に行動を起こすことを通して、我が本荘高校に新しい文化と伝統を築いてほしいものである。

今回の内容は「八十年史」「百年史」に記載が無いため「番外編」とし、小園先生からご了承をいただいた上で紹介させていただきました。

(文責：校長 熊澤耕生)